

「内なる命」への自覚

佐々木昭弘

1 「命」とは何か？

命を大切にする……と、よく口にはするが、その「命」とはいったい何か、その本質について明解に答えることは極めて難しい。この問いに真剣に答えようとするならば、哲学的・宗教的な領域へと踏み込まねばならないのかもしれない。

国語辞典（広辞苑）を引けば、それなりの意味は書かれている。

①生物の生きてゆく原動力、生命力。②寿命。③一生、生涯。④もっとも大切なものの、命ほどに大切に思うもの。真髓。

このような「命」という言葉としての意味を、子どもは知ることはできる。説明すれば何となく納得もする。しかし、「わかる」と「できる」が違うように、「命」という記号的としての言葉の意味を知ることが、「命を大切にする」ことには直接につながらない。人が「命」の尊厳を理解し、「大切にする」という実際の行動に表出するというプロセスは、そんな単純なものではないはずである。

「命を大切にする」ためには「命の尊厳」の理解が必要であり、尊厳の理解のためには「命の存在の実感」が必要である。実際には、「命は大切だ」という命題を幼少のころから繰り返しインプットされる過程で経験（事実）と照合され、「命の存在」を感じ取りながら「命の尊厳」をいう価値観を自らが創り上げていくのだろう。自分自身もそうであったと思う。

いずれにしても、「命の存在」を実感させることは、「命を大切にする」子どもを育てるための出発点と言える。そこで、本稿では、「命」の存在を子ども自身が実感するのはどのような時か、これまでの動物飼育の実践をもとに考えてみる。

2 誕生

教室の水槽で飼っていたメダカが数個の卵を産んだ。卵の第一発見者であった子が「卵がほしい！」というので、フィルムケースに水を入れ、その中に卵を1個入れてあげた。すぐに他の子どもたちも卵がほしいと言い出した。蓋をすれば水はもれないので、子どもたちはポケットの中に入れては持ち歩き、手で握っては温め

る。まさに「卵を抱く」という感覚である。

しばらくすると、卵の変化に気付く子が出てくる。卵の中に黒い点が見えるというのである。さっそく、解剖顕微鏡で観察すると、黒い点の正体はメダカの目であることが分かる。この瞬間から、子どもたちの卵に対する意識に変化が出てくる。

その後、メダカは毎日のように産卵し、約1週間を経て学級の子どもたち全員に卵が手渡った。最後に卵を受け取った子は、日記にこう記している。

フィルムケースの中に小さな卵が入った。小さなメダカの命をあずかった。メダカを育てたことは今までにやったことがない。自信はないが、愛をこめて育てたい。

子どもたちは、暇さえあれば蓋を開けて卵をのぞき込む。時には解剖顕微鏡で拡大し、心臓の動きや血液の流れで生きていることを確かめ、その変化に一喜一憂する。そして、メダカが孵化するのを楽しみに待つようになっていく。ここまでくると、メダカの卵は子どもたちにとって単なる観察の対象ではなく、「ペット」となる。

フィルムケースの水を取り替える時、誤って卵も流してしまったら大変である。そんな時の子どもの落胆は非常に大きく、泣き出してしまう子もいる。ところが、不思議なことに、他の子にとってはそれほどの関心事にはならないことが多い。学級でみんなで飼育している水槽のメダカと同様の（これが観察を目的した飼育動物に対する普通の）冷静な態度なのである。

「自分の卵」「自分が育てている卵」という意識が強ければ強いほど、子どもにとって大切なのは自分のメダカの「命」なのである。卵に対する愛情ともいべき思いに応えるかのようなメダカの卵の変化が、自分のメダカの「命」に対する価値付けだけを大きく膨らましていくのだ。

そう考えると、「命」というものの本質、あるいは実体というものは、わたしたちが客観的に認識できる対象（生き物）に存在するのではなく、わたしが内的に創り上げていく「概念」

(内なる命)と言える。そして、この概念が「信念」とも言える次元になった時、この「内なる命」の存在を、子どもは自覚するのではないか。

3 死

教室でハムスターを飼っている。土日、祝日、そして長期休業の時には、持ち回りで子どもが自宅でお世話を。いわゆる動物の「ホームステイ」で、子どもたちは、自分の順番が来るのを楽しみにしている。

冬休み中のことである。Yからミント（ハムスター）の様子がおかしくなったという電話連絡が入った。昨日の夜まで元気だったらしいのだが、朝になつたらぐつたりしていてあまり動かないという。さっそく獣医の先生に連絡を取り、診察を受けることにした。

ところが、病院に到着する前、ミントは死んでしまった。獣医の先生は、死因について調べるために解剖しなければならないと言う。「どうする？」という顔でYの顔を見ると、こっくりとうなずいた。

動物の解剖が理科の教科書から姿を消して久しいが、解剖することそれ自体が命の教育になることはない。子どもが大切に育ててきたペットの「命」を消してしまったその原因を知りたいと思った時、解剖という行為はその子にとって重要な意味をもつ。この心情は、人間にもそのまま当てはまる。だから、臓器提供や献体に嫌悪感を感じても、身内の不審死に対する司法解剖を人は受け入れができるのかもしれない。（解剖と命の教育との関連については、今後さらなる研究と議論が必要だろう。）

さて、帰る電車の中で、Yがぽつりとつぶやいた。

「ハムスターを飼うのは、少し休みたい。」

動物を飼育するということは、日ごろの世話はもちろん、その動物の死を受け止めることも含めて「飼育」なのだと思う。そのような飼育に対する責任・重さというものは、本来なら動物に十分に触れ合う過程を経て、子どもたちの心の中に少しずつ芽生えていくものなのだろう。しかし、相手はまさに生き物であり、こちらの都合に合わせて死を迎えてくれるはずはない。今回、飼育し始めてあまりに早くハムスターが死んでしまったこともあり、Yの心の傷がどれほどのものだったのかを考えると、わたし自身の心も重かった。

もう一度出発点にもどって考えてみた。学校

や学級の中で動物を飼育することは、その過程で生じた問題を子どもたちが解決していくことに価値があると判断したからではなかったか。「死」というあまりに悲しいショッキングな出来事があつても、そこから子どもたちが学ぶことは何か、学ぶためには何をすればよいのかを考えたいと思ったからではなかったか。ここで飼育活動を打ち切ってしまえば、この子だけでなく他の子どもたちにとっても「いやな思い出」としての経験にとどまってしまうにちがいない。何らかの形で飼育活動を続ける中で、成功経験を積み重ねていくことが、動物飼育を教室内にもちこんだ教師であるわたしの責任でもあるように思えた。

Yたちのグループは、これからも飼育活動を続けるかどうかについて話し合いを始めた。その結果、寒さに強いモルモットを飼いたいと言う。ハムスターの死因の一つに「寒さ」が関係していたからだった。

さて、どうしたものかと考えていると、次の日のYの日記にこんなことが書かれていた。

モルモットの話をお母さんとしていた。

「どうしてモルモットにしたの？」と聞かれて、ぼくはこう言った。

「モルモットは寒さに強いから、死ぬことはないと思うから。」

そしたらお母さんがこう言った。

「じゃあ、寒さに強い動物だから夜の寒さは気にしなくていいのね。」

そう言われて、それはちがうと思ったモルモットはハムスターより体も大きいし、寒さにも強いけど、命は同じ。そして、飼われている動物の命を守るのは飼い主だってことを、ミントは教えてくれたんだな。

母親の言葉によって、Yはこれまでの考えを変え、ハムスターの飼育にもう一度挑戦することになる。飼い主として「命を守る」ことの責任の重さと意味が、Yの心にストンと落ちた瞬間だった。

死んでしまったハムスターは、墓をつくって中庭に埋葬した。数日後、墓の様子を見に行つてみると、花が供えられ卒塔婆のようなものが立てられていた。風で倒れても、数日後にはちゃんとともどっている。春には餌だったヒマワリの種がまかれ、お墓の周りにはヒマワリの花が咲いた。あれから一年以上たった今でも、

子どもたちが墓そうじをしている姿を時々見かける。

ペットである動物が死に、たとえ目の前からいなくなっていても、その「命」は内なる心の中では脈々と生き続いているかのようである。一つの命が消えた時、わたしたちは、信念と化した「内なる命」の存在、そしてその大きさを自覚できることになる。

4 家畜とペット

先日、あるテレビ番組の中で、『豚のPちゃんと32人の小学生』〔黒田恭史著 ミネルヴァ書房〕の実践が取り上げられていた。家畜として豚を育て食べようとスタートした活動だったが、ペット化した豚（Pちゃん）を子どもたちは食べることができない。卒業を前に他の学年へ引き継ぐか、食肉センターに連れて行くか、そのジレンマの中、保護者を含めた子どもたちの議論が展開する。そして、最後は担任の黒田氏にその判断が委ねられ、豚は食肉センターに引き取られていく。ラストシーンで豚を乗せたトラックを泣きながら追いかける子どもたちの姿を見て、これが「命の授業」と言えるか、意見は分かれることと思う。

豚を飼育した九百日にも及ぶ活動と議論の中で、三十二人の子どもたちは、必死に一匹の豚の「命」をどうするかを考えた。そして、その過程で「命」について多くを学んだことは事実と思う。著書を読む限りでは、見切り発車した黒田氏の計画の甘さは否定できないものの、子どもたちと真剣に考え、指導に取り組む姿勢には共感することも少なからずあった。

わたしは、この番組のVTRを学級の子ども

たちに見せ、感想文を書いてもらった。ある子は、次のように言う。

名前をつけたら、絶対に食べられなくなる。名前をつけるというのは、人間と同じ価値があるということを認めているという意味だ。

人間と同じ価値と認めたペットを、食肉センターに送らねばならなかつた子どもたちの中には、きっと深い心の傷を負っている子がいるのではないかと思う。まして相手は小学生、飼育動物を家畜とペットを混同した指導、活動には、やっぱり無理がある。

5 おわりに

命を大切にする子どもはこうすれば育つ……というものがあればよいが、指導によって本当に「命を大切にする子ども」が育つかどうかはだれにも分からぬ。しかし、動物飼育をはじめとした様々な経験に基づいた指導によって、自らの「内なる命」の存在に気づかせることはできる。

そのためには、対象が人であれ動物であれ植物であれ、その子にとって「かけがえのない存在」となるまでかかわることが大切と思う。そうならなければ、「内なる命」は生まれない。「内なる命」への自覚が、しいては「命を大切にする子ども」へと育つ足掛かりになることを願う。

(筑波大学附属小学校 教諭)
『教育研究』2005年2月号掲載原稿

